

城崎を憶ふ

泉鏡花

青空文庫

雨あめが、さつと降ふり出した、停車場ていしやばへ着ついた時ときで——天象せつは卵うの
 花はなくだしである。敢あへて字義じぎに拘泥こうでいする次第しだいではないが、雨あめは其そ
 の花はなを亂みだしたやうに、夕暮ゆふぐれに白しろかつた。やゝ大粒おほつぶに見みえるの
 を、もし掌たなごころにうけたら、冷つめく、そして、ぼつと暖あたに消かえたであら
 う。空そらは暗くらく、風かぜも冷つめたかつたが、温泉ゆの町まちの但馬たじまの五月ごぐわつは、
 爽さわやかであつた。

くるまほろふか
 俥はこは幌ふかを深くしたが、雨あめを灌そいで、鬱陶うつたうしくはない。雨りやうが
 側はがたかやなみな成なつたと思おもふと、立たち迎むかふる山やまの影かげが濃こい緑みどりを
 籠こめて、輻やとともに動うごいて行く。まだ暮果くれはてず明あかいのに、濡ぬれつ
 ゝ、ちらちらと灯ひともれた電燈でんとうは、燕つばめを魚めのやうに流ながして、静しづかな谿た

にがは そ 川に添つた。流は細い。横に二つ三つ、續いて木造の橋が濡れいろ ひか 色に光つた、此が旅行案内で知つた圓山川に灌ぐのである。

此の景色の中を、しばらくして、門の柳を潜り、帳場の入らつしやい——を横に聞いて、深い中庭の青葉を潜つて、別にはなれに構へた奥玄關に俔が着いた。旅館の名の合羽屋もおもしろい。

へい、ようこそお越しで。挨拶とともに番頭がズイと掌で押しだ おしだ 押出して、扨て黙つて顔色を窺つた、盆の上には、湯札と、手ぬぐひ ぬぐひ 拭が乗つて、上に請求書、むかし「かの」と云つたと聞くがごと ごと 形式のものが翻然とある。おやく前勘か。否、然うで

ない。……特、一、二、三等の相場づけである。温泉の雨を掌に握つて、我がものにした豪儀な客も、ギョツとして、此れは悄氣る……筈の處を……又然うでない。實は一昨年の出雲路の旅には、仔細あつて大阪朝日新聞學藝部の春山氏が大屋臺で後見について居た。此方も黙つて、特等、とあるのをポンと指のさきで押すと、番頭が四五尺するくと下つた。
 （百兩をほどけば人をしさらせる）古川柳に對して些と恥かしいが（特等といへば番頭座をしさり。）は如何？ 串戲ぢやあない。が、事實である。

棟近き山の端かけて、一陣風が渡つて、まだ幽に影の残つた裏櫺子の竹がさらくと立騒ぎ、前庭の大樹の楓の濃

い緑みどりを壓おさへて雲くもが黒くろい。「風かぜが出でました、もう霽あがりませう。」

「これはありがたい、お禮れいを言いふよ。」「ほほほ。」ふつくり色いろろじろ

白しろで、帶おびをきちんとした島田しまだ髷まげの女中ぢようちうは、白地しろぢの浴衣ゆかたの世せ話をわしながら笑わらつたが、何なにを祕かくさう、唯ただ今いまの雲行くもゆきに、雷鳴らいめい

をともしなひはしなからうかと、氣遣きづかつた處ところだから、土地とちツ子の天て

氣豫報んきよほうの、風かぜ、晴はれ、に感謝かんしゃの意いを表へうしたのであつた。

すぐ女中ぢようちうの案内あんないで、大おほく宿しゆくの名なを記しるした番傘ばんがさを、前後あとさき

に揃そろへて庭下駄にはげたで外湯そとゆに行く。此この景勝けいしやう、愉樂ゆらくの郷きやうにして、内うち

湯ちゆのないのを遺憾ゐかんとす、と云いふ、贅澤ぜいたくなものもあるけれども、何なに

あをてんじやう青天井あをてんじやう、いや、滴したる青葉あをばの雫しづくの中なかなる廊下らうかづ續つぎきだと思おもへば、

渡わたつて通とほる橋はしにも、川かはにも、細こま々／＼とからくりがなく洒張さつぱりし

て一層いっそう好いい。本雨ほんあめだ。第一だいいち、馴なれた家いへの中なかを行ゆくやうな、傘かささした女ぢよちう中の斜ななめな袖そでも、振事ふりごとのやうで姿すがたがいい。

——湯ゆはきびくと熱あつかつた。立つと首くびツたけある。誰たれの？…

…知しれた事拙ことせつしや者やのである。處ところで、此このくらゐ熱あつい奴やつを、と顔かほを

ざぶくと冷れい水すゐで洗あらひながら腹はらの中なかで加減かげんして、やがて、湯ゆを

出でる、ともう雨あめは霽あがつた。持もちおもりのする番傘ばんがさに、片手腕かたてうでま

くりがしたいほど、身みのほてりに夜風よかぜの冷つめい快たきは、横町よこちやうの

錢湯せんたうから我家わがやへ歸かへる趣おもむきがある。但往交たゞゆきかふ人々ひと／＼は、皆名所みなめいしよ

繪ゑの風情ふぜいがあつて、中なかには疇ねぐらに立迷たちまよふ旅商人たびあきうどの状さまも見みえた。

並ならんだ膳ぜんは、土地とちの由緒ゆゑしよと、奥行おくゆきをもの語がたる。手てを突張つつぱる

と外れはづさうな棚たなから飛出とびだした道具だうぐでない。藏くらから顯あらはれた器うつはらし

い。御馳走は——

鯛たひの味噌汁みそしる。人參にんじん、じゃが、青豆あをまめ、鳥とりの椀わん。鯛たひの差さ

味しみ。胡瓜きゅうりと烏賊いかの酢すのもの。鳥とりの蒸焼むしやき。松茸まつたけと鯛たひの

土瓶蒸どびんむし。香かうのもの。青菜あをなの鹽漬しほづけ、菓子くわし、苳いちご。

所謂いはゆる、貧僧ひんそうのかさね齋どきで、ついでに翌朝よくてうの分ぶんを記しるして置お

く。

蜆しじみ、白味噌汁しろみそしる。大蛤おほはまぐり、味醂みりんむし。並ならびに茶碗蒸ちやわんむし。落ふき

椎茸しひたけつけあはせ、蒲鉾かまぼこ、鉢はち。淺草海苔あさくさのり。

おほきはまぐりと
大な蛤おほはまぐり、十ウばかり。(註、ほんたうは三個)として、蜆しじみも見み

事ごとだ、碗わんも皿さらもうまいく、と慌あわてて瀬戸せとものを噛かじつたやうに、

覺おぼえがきに記しるしてある。覺おぼえ方かたはいけ粗雑ぞんざいだが、料理れうりはいづれ

も念入りで、分量も鷹揚で、聊もあたじけなくない處が嬉しい。

三味線太鼓は、よその二階三階の遠音に聞いて、私は、ひつそりと按摩と話した。此の按摩どのは、團栗の如く尖った頭で、くろめがねを掛けて、白の筒袖の上被で、革鞆を提げて、黒目金を掛けて、白の筒袖の上被で、革鞆を提げて、そくに立つて、「お療治。」と顯はれた。——勝手が違つて、私は一寸不平だつた。が、按摩は宜しう、と縁側を這つたのでない。此方から呼んだので、術者は來診の氣組だから苦情は言へぬが驚いた。忽ち、縣下豊岡川の治水工事、第一期ろつぴやくまんゑんなりと胸を反らしたから、一すくみに成つて、内六百萬圓也、と胸を反らしたから、一すくみに成つて、内々期待した狐狸どころの沙汰でない。あの、潟とも湖とも

見えた……寧ろ寂然として沈んだ色は、大なる古沼か、千年
 もとせ百年ものいはぬ静かな淵かと思はれた圓山川の川裾には――
 河童か、獺は？……などと聞かうものなら、はてね、然やうな
 ものが鯨の餌にありますか、と遣りかねない勢で。一つ驚かされ
 たのは、思ひのほか、魚が結構だ、と云つたのを嘲笑つて、
 つい津居山の漁場には、鯛も鱸もびち／＼刎ねて居ると、掌
 を肩で刎ねた。よくせき土地が不漁と成れば、佐渡から新潟へ
 ……と聞いた時は、枕返し、と云ふ妖怪に逢つたも同然、
 敷込んだ布團を取つて、北から南へ引くりかへされたやうに吃
 驚した。旅で劍術は出来なくても、學問があれば慙うは
 おどろおどろ。だから學校を怠けては不可い、従つて教はつた事を

わす 忘れては不可い、但馬の圓山川の灌ぐのも、越後の信濃川の
 灌ぐのも、船ではおなじ海である。
 私わたしは佐渡さどと云ふ所は、上野うへのから碓氷うすひを越えて、雪の柏原かしはばら、
 關山せきやま、直江津なほえつまはりに新潟邊にひがたへんから、佐渡さどは四十五里波の上しじふごりなみ、
 と見るか、聞きかするものだ、と浮うりして居た。七日前に東なぬかぜん
 京驛やうえきから箱根越はこねこしの東海道とうかいだう。——分わかつた——逗留とうりうし
 た大阪おほさかを、今日午頃けふひるごろに立つて、あゝ、祖母おばあさんの懷ふところで昔むかし
 話なしに聞いた、栗くりがもの言いふ、たんばの國くに。故わざと下りて見た篠み
 山まの驛えきのプラットホームを歩行あるくのさへ、重疊ちようでふと連る山を
 見れば、熊くまの背せに立つ思おもひがした。酒顛童子しゆてんどうじの大江山おほえやま。百人ひやくに
 一首いっしゆのお嬢ぢやうさんの、「いくのの道みち」もそれか、と辿たどつて、はる

／＼と來た城崎で、佐渡の沖へ船が飛んで、キラリと飛魚
 が刎出したから、きたなくも怯かされたのである。——晩もお總
 うさい 菜に鮭を退治た、北海道の産である。茶うけに岡山のきび
 だんご 團子を食べた處で、咽喉に詰らせる法はない。これしかながら
 たびこゝろ 旅の心であらう。——

夜はやゝ更けた。はなれの十疊の奥座敷は、圓山川の洲
 ひとところ の一處を借りたほど、森閑ともの寂しい。あの大川は、
 いく野の銀山を源に、八千八谷を練りに練つて流れるので、
 みづたぐひ 水は類なく柔かに滑だ、と又按摩どのが今度は聲を沈めて話した。
 とよをか 豊岡から來る間、夕雲の低迷して小浪に浮織の紋を敷

いた、漫々たる練絹に、汽車の窓から手をのばせば、蘆の葉
あし
 越に、觸ると揺れさうな思で通つた。旅は楽しい、又寂しい、とし
ごし
 をらしく成ると、何が、そんな事。……ぢきその飛石を渡つた
な
 小流から、お前さん、苦船、屋根船に炬燵を入れて、美しい
こながれ
 のと差向ひで、湯豆腐で飲みながら、唄で漕いで、あの川裾
さしむか
 から、玄武洞、對居山まで、雪見と云ふ洒落さへあります、と
げんぶどう
 言ふ。項を立てた苦も舷も白銀に、珊瑚の袖の揺るゝ時、船は
うなじ
 たゞ雪を被いだ翡翠となつて、白い湖の上を飛ぶであらう。氷柱
ゆき
 の蘆も水晶に――
あし

金子の力は素晴らしい。

わたしはうそ
私は獺のやうに、ごろんと寝た。

さう
而して夢に小式部を見た。

うそ
嘘を吐け！

パイロロロパイ——これは夜が明けて、晴天に鳶の鳴いた聲ではない。翌朝、一風呂キヤ／＼と浴び、手拭を絞つたまゝ、からりと晴れた天氣の好さに、川の岸を坦々とさかのぼつて、來日ヶ峰の方に旭に向つて、晴々しく漫步き出した。九時頃だが、商店は町の左右に客を待つのに、人通りは見掛けない。静な細い町を、四五間ほど前へ立つて、小兒かと思ふ小さな按摩どのが一人、笛を吹きながら後形で行くのである。パイロロロパイとしよんぼりと行く。トトトン、トトトン、と間

をゆる緩く、其處等の藝妓屋で、朝稽古の太鼓の音、ともに何となく翠の滴る山に響く。

まだ羽織も着ない。手織縞の茶つぽい袷の袖に、鍵裂が出
 来てぶら下つたのを、腕に捲くやうにして笛を握つて、片手向う
 づきに杖を突張つた、小倉の櫂の口が、ぐたりと下つて、裾のよ
 ぢれ上つた瘦脚に、ぺたんことも曲んだとも、大きな下駄を引
 摺つて、前屈みに俯向いた、瓢箪を俯向に、突き出た出額の
 尻すぼけ、情を知らず故らに繪に描いたやうなのが、パイロロロ
 ピイと仰向いて吹いて、すぐ、ぐつたりと又俯向く。鍵なりに町
 を曲つて、水の音のやゝ聞こえる、流の早い橋を越すと、又道が
 折れた。突當りがもうすぐ山懷に成る。其處の町屋を、馬

の沓形くつがたに一廻りひとまはして、振返ふりかへつた顔かほを見ると、額ひたひかくに隠れて目めの窪くぼんだ、頤あごのこけたのが、かれこれ四十ぐらゐな年としであつた。
うかくと、あとを歩行あるいた方は勝手かうてだが、彼は勝手かれ かつてを超越てうゑつした朝飯前あさめしまへであらうも知れしない。笛ふえの音が胸むねに響ひびく。
わたしわたしは欄干らんかんにイたゝずんで、返りかへを行違ゆきちがはせて見送みおくつた。おなじやうに、或は傾あるひかたむき、また俯向うつむき、さて笛ふえを仰あふいで吹ふいた、が、やがて、來た道き みち なかを半ば、あとへ引返ひきかへした處ところで、更あらためて乗のつかる如ごとく下駄げたを留とどめると、一方いつぽう、鎮守ちんじゆの社やしろの前まへで、ついた杖つゑを、丁ちやうと小脇こわきに引ひきそばめて上げあつゝ、高々たか／＼と仰向あふむいた、さみしい大おほきな頭あたまばかり、屋根やねを覗のぞく來日くるひヶ峰みねの一處ひとところを黒く抽ぬいて、影法かげぼうし師しを前まへに落おとして、高たからかに笛ふえを鳴ならした。

——きよきよらツ、きよツ／＼きよツ！

はつせんやたに なが、まるやまがは 八千八谷を流るゝ、はつせんやこゑ 圓山川とともに、とな 八千八聲と稱ふる

ほとゝぎす

杜鵑は、ともに此地の このち 名物である。それも昨夜の さくや 按摩が あんま 話

した。其時、口で眞似たのが これ 此である。例の れい (ほぞんかけたか)

を此の こ 邊では、(きよきよらツ、きよツ／＼)と聞 き くらいしい。

ひと聲、こゑ 血に泣く其の笛を吹き落すと、按摩は、とぼ／＼と横 よ

路地へ入つて消えた。

續いて其處を通つたが、もう見えない。

私は何故か、ぞつとした。

太鼓の音の、のびやかなあたりを、早足に急いで歸るのに、

途中で橋を渡つて岸が違つて、石垣つゞきの高塀について、

ぶ 打つかりさうに大な黒い門を見た。立派な門に不思議はないが、
くぐり戸も燗つたまゝ、扉が夥多しく裂けて居る。覗くと、山
の根を境にした廣々とした庭らしいのが、一面の雑草で、
遠くに小さく、壊れた四阿らしいものの屋根が見える。日に水
の影もさゝぬのに、其の四阿をさがりに、二三輪、眞紫
の菖蒲が大きくぱつと咲いて、縋つたやうに、倒れかゝつた竹の棹
も、池に小船に棹したやうに面影に立つたのである。
此の時の旅に、色彩を刻んで忘れないのは、武庫川を過ぎた生
瀬の停車場近く、向う上りの徑に、じり／＼と蕊に香を立てて咲
揃つた眞晝の芍薬と、横雲を眞黒に、嶺が颯と暗かつ
た、夜久野の山の薄墨の窓近く、草に咲いた姫薊の紅と、

——此この菖蒲しやうぶの紫むらさきであつた。

ながめて居ゐる目めが、やがて心こゝろまで、うつろに成なつて、あツと思おもふ、つい目めさきに、又またうつくしいものを見みた。丁ちやうど瞳ひとみを離はなして、あとへ一ひと歩あし振向ふりむいた處ところが、川かはの瀬せの曲まがり角かどで、やゝ高たかい向むかう岸ぎしの、崖がけの家の裏うち口ぐちから、巖いはを削けつれる状さまの石段いしだん五ご六ろく段だんを下おりた汀みぎはに、洗せん濯たくものをして居ゐた娘むすめが、恰あたもほつれ毛げを搔かくとて、すんなりと上あげた眞白まつしろな腕うでの空そらざまなのが睫毛まつげを掠かすめたのである。

ぐらり、がたがたん。

「あぶない。」

「いや、これは。」

すんでの處。ところ

——落つこちるのでも、身投でも、はつと抱きと

める救手は、何でも不意に出る方が人氣が立つ。すなはち同

行の雪岱さんを、今まで祕しておいた所以である。

私は踏んだ石の、崖を崩れかゝつたのを、且つ視て苦笑した。

餘りの不状に、娘の方が、優しい顔をぽつと目瞼に色を染め、膝ま

で卷いて友禪に、ふくら脛の雪を合はせて、紅絹の影を流に散

らして立つた。

さるにても、按摩の笛の杜鵑に、抜かしもすべき腰を、娘

の色に落ちようとした。私は羞ぢ且つ自ら憤つて酒を煽つた。――

――なほ志す出雲路を、其日は松江まで行くつもりきしやの汽車には、ま

だ時間がある。私は、もう一度宿を出た。

すぐ前なる橋の上に、まへ はし うへ 頼ほい被かぶりした山家の年増が、苞つとを開いて、
 一人行く人のあとを通つた、私わたしを呼んで、手てを舉あげて、「大おほきな自じ
 然ねんじ薯よか買かうておくれなはらんかいなア。」……はおもしろい。朝あさ
 まだきは、旅り館よくわんの中庭なかにはの其處そここゝ此處を、「大おほきな夏蜜柑なつみかん買か
 はんせい。」……親仁おやぢの呼聲よびこゑを寢ねながら聞きいた。働はたらく人の賣うり
 聲こゑを、打うち興きようずるは失禮しつれいだが、旅人たびびとの耳みみには唄うたである。
 漲みなぎるばかり日の光ひかりを吸すつて、然しかも輕かるい、川かは添そひの道みちを二町にちやうば
 かりして、白しろい橋はしの見えたのが停車場ていしやばから突通つきとほしの處ところであつ
 た。橋はしの詰つめに、——丹後行たんごゆき、舞鶴行まひづるゆき——住すみの江丸えまる、濱鶴丸はまづるまる
 と大看板おほかんばんを上げたのは舟宿ふなやどである。丹後行たんごゆき、舞鶴行まひづるゆき——
 立つて見たみたばかりでも、退屈たいくつの餘あまりに新聞しんぶんの裏うらを返かへして、バ

ンクバー、シャトル行を睨むが如き、情のない、他人らしいものではない。――蘆あしの上をちら／＼と舞まふ陽炎かげろふに、袖そでが鴉かもめになりさうで、遙はるかに色いろの名所めいしよが偲しのばれる。手輕てがるに川かは蒸汽じようきでも出さうである。早はや、その蘆あしの中なかに並ならんで、十四五艘じふしごさうの網船あみぶね、田船たぶねが浮ういて居た。

どれかが、黄金わうごんの魔法まほうによつて、雪ゆきの大川おほかはの翡翠ひすゐに成なるらしい。圓山川まるやまがはの面おもては今いま、こゝに、其その、のんどりと和なごみ軟やいだ唇くちびるを寄せて、蘆摺あしずれに汀みぎはが低ひくい。イめば、暖あたく水かみづに抱いだかれた心地こゝちがして、藻もも、水草みづくさもとろ／＼と夢ゆめが蕩とろけさうに裾すそに靡なびく。おゝ、澤山たくさんな金魚藻きんぎよもだ。同町内どうちやうないの瀧君たきくんに、ひと俵贈たはおくらうかな、……水上みなかみさんは大おほきな目めをして、二七にしちの縁日えんにちに金魚藻きんぎよも

をさが探して行く。……

わたしうみ海そらの空を見た。輝く如きは日本海にっぽんかいの波なみであらう。鞍掛くらかけ

山やま、太白山たいはくざんは、黛いれずみを左右みぎひだりに描えがいて、來日くるひヶ峰みねは翠みどりなす額ひたひがみ髪

を近ちか々／＼と、面おもほてりのするまで、じり／＼と情熱じやうねつの呼い

吸きを通かよはす。緩ゆるい流ながれは浮草うきぐさの帶おびを解といた。私わたしの手を觸ふれなかつ

たのは、濡ぬれるのを厭いとつたのでない、波なみを恐おそれたのでない。圓まるや

山川まがはの膚はだに觸ふれるのを憚はづかつたのであつた。

城崎きのさきは——今いまも恁かくごとの如めく目に泛うかぶ。

こゝに希有けうな事ことがあつた。宿やどにかへりがけに、客きやくを乗のせた俣くるまを

見みると、二臺にだい三臺さんだい、俣夫くるまやが揃そろつて手てに手てに鐵棒かなぼうを一ひとすぢ條ぢづゝ

提^さげて、片^{かた}手で楫^{かぢ}を壓^おすのであつた。――煙^{たばこ}草^かを買^かひながら聞^きくと、土地^{とち}に數^{かず}の多い犬^{いぬ}が、俥^{くるま}に吠^{ほえつ}附^{つき}き戯^ぎれかゝるのを追^{おひ}拂^{はら}ふためださうである。駄^だ菓子屋^{わしや}の縁^{えん}臺^{だい}にも、船^{ふな}宿^{やど}の軒^{のき}下^{した}にも、蒲^か燒^ば屋^やの土^ど間^まにも成^{なる}程^{ほど}居^ゐたが。――言^いふうちに、飛^{とび}かゝつて、三^{さん}疋^び四^し疋^ひ、就^な中^{なか}先^{せん}頭^{とう}に立^たつたのには、停^{てい}車^{しや}場^ば近^{ぢか}く成^なと、五^ご疋^ひばかり、前^{ぜん}後^ごから飛^とびかゝつた。叱^{しつ}、叱^{しつ}、叱^{しつ}！ 畜^{ちく}生^{しやう}、畜^{ちく}生^{しやう}、畜^{ちく}生^{しやう}。俥^{くるま}夫^やが鐵^{かな}棒^{ぼう}を振^ふ舞^{まは}すのを、橋^{はし}に立^たつて見^みたのである。

其^その犬^{いぬ}どもの、耳^{みみ}には火^ひを立て、牙^{きば}には火^ひを齒^はみ、焰^{ほのほ}を吹^ふき、黒^{くろ}煙^{けむり}を尾^をに倦^まいて、車^{くるま}とも言^いはず、人^{ひと}とも言^いはず、炎^{ほのほ}に擲^{から}んで、躍^{をどり}上^{あが}り、飛^{とび}蒐^かり、狂^{くる}立^{ひた}つて地^ぢ獄^{ごく}の形^{ぎやう}相^{さう}を顯^{あらは}した

であらう、と思はず身の毛を慄おそ立てたのは、昨きのう、十四年五月
 二十三日十一時十分、城崎豊岡大地震大火の號ごう
 外わいを見みると同時であつた。

地方は風物に變化が少い。わけて唯一年、もの凄すごいやう

に思ふのは、月は同じ月、日はたゞ前後して、——谿川たにがはに倒たふれ

かゝつたのも殆ど同じ時刻である。娘も其處に按摩も彼處に——

其の大地震を、あの時既に、不氣味に按摩は豫覺したるにあ

らざるか。然らば八千八聲を泣きつゝも、生命だけは助かつ

たらう。衣きぬを洗あらひし娘も、水に肌は焦こがすまい。

當時寫眞を見みた——湯ゆの都みやこは、たゞ泥と瓦の丘となつて、な

きがらの如ごとき山あるのみ。谿川たにがはの流は、大むかでの爛たぐれたやう

に……其その寫真しゃしんも赤あかく濁にごる……砂すな煙けむりの曠野くわうやを這はつて居ゐた。
 木きも草くさも、あはれ、廢屋はいをくの跡あとの一輪いちりんの紫むらさきの菖蒲あやめもあらば、
 それがどんなに、と思おもふ。

——今いまは、柳やなぎも芽めんだであらう——城崎きのさきよ。

大正十五年四月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「城崎《きのさき》を憶《おも》ふ」となっています。

※表題の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：米田進

2002年5月8日作成

2016年2月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

城崎を憶ふ

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>